

体営業が奏功

コンプレッサー・タービンとポンプ

荏原製作所のエネルギーカンパニーは、気体を扱うコンプレッサー・タービンと、液体を扱うポンプの双方を取り扱うユニークな存在として、世界のエネルギー市場におけるプレゼンス向上に努めている。宮木貴延エネルギーカンパニープレジデントに聞いた。

▼…事業環境をどうみま
すか。

「液化天然ガス（LNG）とエチレンプラント向けポンプやコンプレッサー・タービンがエネルギーカンパニーの売り上げの大半を占めている。

荏原 エネルギーカンパニープレジデント 宮木 貴延 氏に聞く



2024年12月期の売上収益は2104億円と前期比25・8%増加したが、足元では北米や中国で投資決定に遅れが生じており、今期の売上収益は2050億円を見込んでいる。ただ中長期的に市場が拡大傾向にあることに変わりはない。とくにLNGは人口増加やアジアの経済発展に加え、脱炭素に向けたトラ

ンジションエネルギーとして、また安全保障上の問題からも需要が急増しており、40年頃まで生産量は2倍近く増えていくだろう」

▼…今期を最終年度とする3力年の中期経営計画の評価は。

「製品別に構成している事業部を、顧客や市場を起点とした構成に変更したのが今中計の出発点だった。これにともない、それまでは分かれていたカスタムポンプとコンプレッサー・タービンの営業、サービス機能を統合した。一体営業を展開したことで、サウジアラビア・ジユベイルの大型石油化学コンプレックス『AMIRALプロジェクト』において、コンプレッサー・タービン、カスタムポンプの一括受注を実現できたのは大きな成果といえる。有力顧客に対しては専門組織を設置し、将来の方向性をつかむための中長期的な関係構築にも努めており、さらなる成果へとつながっていききたい」

生産、サービスとも最適化

▼…サービス体制強化の進捗は。

「コンプレッサー・タービンとカスタムポンプの営業、サービス機能の統合の一環として、インドネシアに両製品を対象としたサービス拠点を新設した。また中東ではサウジアラビアで23年に稼働を開始したコンプレッサー・タービン向けのサービスショップに加え、年内にもアブダビに新拠点を開設する。米国ではヒューストンの旗艦拠点を拡充を進めている。一方でカナダのバーリントンとグアテマラの拠点を統廃合し、収益性を一層高めていく体制が整った」

脱炭素・新エネ向け開発へ

▼…関税や地政学リスクの観点から、今後のグローバル事業体制をどう考えますか。

「米国・ペンシルベニア、日本・袖ヶ浦はコンプレッサー・タービン、インド・バンガロールはコンプレッサー部品、中国・浙江省と山東省はポンプと5つの主要製造拠点を有しており、需要地の近くで生産し、必要に応じて輸出する体制を整えている。関税の影響についてはある程度みえてきたが、この体制のおかげで限定的だと考えている。ただ、今後は世界中どこで作っても、どこにでも出せるという考え方が必要になり、高深度地熱発電向け製品、太陽熱発電向け製品などがある。今中計スタート時よりも脱炭素市場の立ち上がりは遅れているが、検討の引き合いは旺盛だ」

▼…新規ソリューションの展開状況は。

「脱炭素や新エネルギーに向けて、ポンプとコンプレッサー、それぞれ単品ではなし得なかった性能を実現する製品の開発を進めている。二酸化炭素（CO₂）分離回収・貯留（CCS）向けポンプとコンプレッサーのパッケージシステムをはじめ、水素向けコンプレッサー、アンモニア向けポンプ、さらに未来に向けては高深度地熱発電向け製品、太陽熱発電向け製品などがある。今中計スタート時よりも脱炭素市場の立ち上がりは遅れているが、検討の引き合いは旺盛だ」

（聞き手＝石井惇子）